

巻頭の言葉

京都文教大学地域協働研究教育センター長 松田 美枝

我が国は、少子超高齢社会となって久しく、それに伴うさまざまな課題が生じる中で、大学もその存在意義を問われている。そのような中で、小規模私立大学としての京都文教大学は「ともいき社会」の実現に資するべく、地域志向を旗印に一步ずつ地道に歩んできている。

「子ども」については、子どもたちが安心して育つことのできる環境や、親のサポート資源が必要とされている。これまでに本学では、学生による「ママさんサポーター」や、子ども食堂での学習・遊びの支援、子育て支援スペースとしての「にこにこルーム」やサテライトキャンパス伏見大手筋「あそびの広場」、就労体験をしながら社会について学ぶ「子ども記者クラブ」などが実践されてきた。また、高校生と大学生がともに企業見学に行ったり、社会人も交えて街づくりのワークショップを行ったりもしている。これらは子どもや若者を育てる地域づくりであると同時に、将来にわたって地域を支え続ける、未来への働きかけであるともいえる。

「高齢者」については、「宇治市高齢者アカデミー」が10年の節目を迎えた。65歳以上の宇治市民が本学で週1コマの授業を履修し、月1回のゼミ活動（アカデミーアワー）に参加する制度で、2年間の学びを修めることになっている。関心のあるテーマで履修科目を選択し学びつつ、それを自身の地域活動と繋げたり、卒業研究に発展させたりすることができる。アカデミー生の熱心な参加により、授業や課外活動も活気づいており、地域連携学生団体との交流もなされてきた。また、それとは別に、臨床心理学部教員と宇治市の協働による「認知症アクションアライアンス」の取組みもなされ、認知症当事者とその家族、

学生、一般市民、行政や医療関係者等が協働して「認知症にやさしいまち・うじ」を展開してきた。これらの活動を通して、高齢者の存在は学生世代や勤労世代に叡智と意欲を与えてくれることを実感している。

本学では様々な世代の多様な主体との地域連携と交流がなされてきており、地域のプラットフォームとして機能していると自負している。上記はその一端に過ぎず、さらに幅広く、様々な専門性をもつ教員が、それぞれの分野に通じる学外の方々と共に共同研究を行っている。その成果を報告する場として本ジャーナルはあり、創刊号に続いて、この度、第2号を刊行できることには格別の喜びがある。本号では、中小企業やアニメーション制作会社の経営戦略についての研究や、障がい者の就労支援と家族支援、人を取り巻く環境や自発的運動習慣についての研究など、多領域にわたる研究が報告されている。ぜひ、お目通し頂き、地域とともに歩む本学の動向に注目して頂ければ幸いである。そして、世代を問わず、ともにこの京都を活性化する担い手となって頂けることを、ぜひとも願いたい。